



Title	わが国における戦後世代論の展開と課題
Author(s)	長浜, 功; NAGAHAMA, Isao
Citation	北海道大學教育學部紀要, 17, 1-15
Issue Date	1970-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/29049">https://hdl.handle.net/2115/29049</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	17_P1-15.pdf



# わが国における戦後世代論の展開と課題

Analysis and Subject of Generation Theory in Post-war Japan

長 浜 功

Isao NAGAHAMA

## 概 要

本稿は日本における近代思想史中に占める世代論を戦後から現在にいたる展開過程をたどり、その課題を明らかにしようと試みたものであり、戦争体験をめぐる世代の相違、断層、さらに戦後世代の特徴と性格などについて分析したものである。世代論はこれまでどちらかといえば風俗の次元として扱われ、過少評価されてきたきらいがある。こうした世代論をいま一度発掘しなおして、これを社会理論の視座の中にどう位置づけることができるかという検討が、本稿においてなされている。すなわち世代論の問題点と残された課題は何か。それは今日的な状況の中ではどう位置づけられるのか、といった問題点を世代論の構造を明らかにする過程で追究しようとするものである。

## 目 次

研究の目的

第1章 戦後世代論の展開

第2章 世代区分の基準

第3章 戦後世代論の性格

第1節 世代論の位置づけ

第2節 戦争体験と世代論

第3節 戦後世代

第4章 戦後世代論の課題

第1節 世代の断層

第2節 世代論と青年教育

## 研究の目的

本稿はわが国における世代論の展開と課題を明らかにし、そこにおける問題点を明確にするという目的から書かれたものである。世代論はわが国の近代思想史のなかで時系的には現代に近い時点に位置づけられている。したがって本稿もまた戦後におけるわが国の世代論が中心となって展開される。世代論は戦後ジャーナリズムの上では過大に評価され、数多く取上げられてきたけれども、アカデミズムの上では過少に評価されてきた。したがって世代論の正当な評価は今後にまつところが多く、とりわけ社会理論の視座の中にどう位置づけるかという課題がとり残されている現状である。戦後の日本の世代の対立・葛藤・緊張が20数年の社会に投げかけた陰影は日本の社会各層深部に浸透しており、教育・労働・社会等あらゆる分野に有形無形の影を落としている。本稿は

そうした世代の問題を日本という限られた範囲の中で、世代論が果たしてきた役割と機能を考察していこうとするものである。したがって研究の方法は戦後を中心とするわが国の世代論について総点検を行ない、それらを問題別に区切りながら、その展開の整理を行なう作業が必要である。そうした手続きには当然のことながら、戦後日本の動きと深く関連させる必要がある。とくに戦後日本の思想状況と世代論は密接な関係にあり、両者関連の吟味も充分に行なうことが必要である。

さらに重要なことは世代論が社会理論の中に占めてきた位置の再検討をするということである。世代論が社会理論とりわけ思想史の中に占めてきた位置はかなり低いものであった。世代論はあまりにも抽象論的であって科学としての厳密な現実的な検証に耐えるものではない、という考え方は今日いぜんとして強い。たとえば教育という一つの領域の中に世代論が入りうるのは社会教育がもっとも近い。すなわち世代論の中軸をなすのは青年で

あるが、青年教育と世代論を結びつけても実際には役に立たない。むしろ問題の本質を陰蔽するものだとする考え方が普通である。

たしかに世代論は完全な理論ではない。いろいろな欠陥もあるし欠落もある。そのことについては後で詳説するが、本稿の目的の一つは世代論の批判と反省の過程をふまえたうえで正当な評価を与えていくことである。

以上の諸点から、本研究の対象範囲を要約するとつぎのとおりである。

- (1) わが国の世代論はどのような展開をしてきたか。その状況を整理すること。
- (2) それとともに、世代論が、戦後社会の中でどのような位置を占めてきたか。
- (3) 世代論のもつ性格とは何か。とくに戦後世代に対する評価をどう行なうか。
- (4) 世代論の社会理論的位置づけは可能か。
- (5) 世代論の課題とは何か。そして世代論の今日の状況における意味とは何か。

## 第1章 戦後世代の展開

第2次大戦後のわが国の歴史は、それ以前の歴史にまして密度の濃いものだったといつてよい。それは、それまで国民がもっていた天皇制国家と家族制度のタテ糸の秩序がくずれ去ると同時に、国民が国家の主権者となるというこれまでの価値概念の逆転であり、いわばヨコ糸

としての平等秩序が新しい社会として生まれ変わろうとした重大な歴史的な転換であった。しかし、戦後休む間もなくおそってきた食糧難と、旧体制維持を企図する勢力の抬頭、アメリカ占領軍による輸入近代思潮としてのデモクラシーが化けの皮を次第にはいでくるという事態になって、主権者としての国民の立上りがりが民主的な指導層のもとに展開された。それゆえわずか20余年の戦後の歴史ほど密度の高かった時代はない。右から左に大きく振幅する価値概念の混乱の中を日本の民衆は生きのびてきた。

そうした戦後の足跡を思想史的に概観してみると(第1表参照)さまざまな論争が、あるときは間断なく、またあるときは断絶をおきながら展開されてきたことがわかる。いまはそれらの諸論争にたちいって述べる余裕もないが、これらの論争は今日なお十分な検討に値するものであるということがいえるであろう<sup>(1)</sup>。それと同様なカテゴリーの中に世代論が位置づけられており、第1表でみるとおり敗戦後若干の欠落があるものの、戦後ほぼ平均的に登場していることがわかる。いまこれをもう少し詳しく分析してみることにしよう。

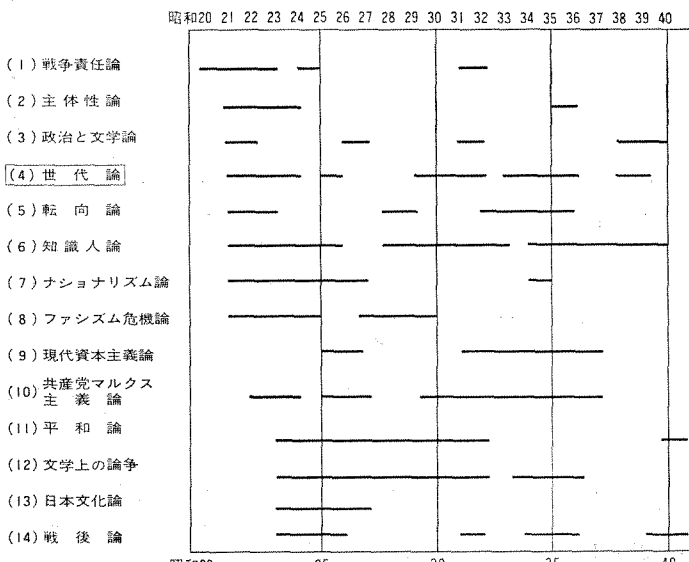
第1図(次頁)は終戦の年から昭和42年にいたるまでの間の世代論を網羅的に調べたものをまとめたものである<sup>(2)</sup>。この図表からつぎの5点にわたる事実を読みとることができる。

すなわち第1に戦後における世代論の展開がなされたのは昭和21年の、敗戦による社会的・政治的混乱期である。この期の世代論の特徴は戦争責任の道義的・政治的反省と批判、そして新しい社会の建設の担い手としての若い世代に対する期待がこめられていることが特徴的である。

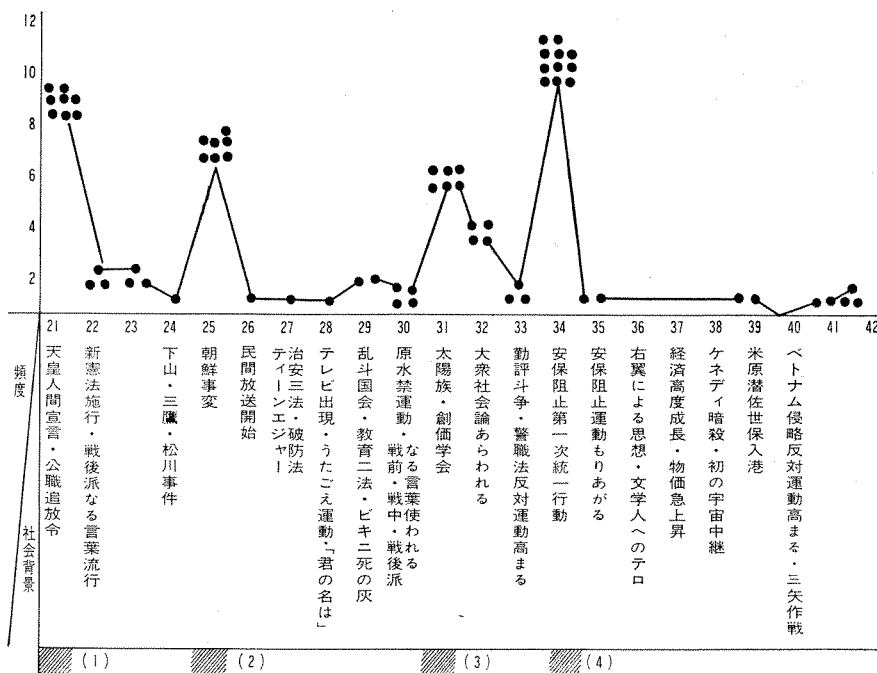
第2に世代論が展開された時期は朝鮮事変を境とした年であるということである。このことはいいかえれば戦後、国民の大多数から一時歓迎されたアメリカンデモクラシーが、日本の独立と平和に貢献するものではなかったということを日本の朝鮮戦争に対する軍事加担を眼のあたりにして国民が危機感をもって受けとめた時期にあたっている。戦後民主主義の危機をいかにして守っていくかということが国民的課題としてとりあげられたのがこの期であった。

第3に戦後10年たった時点ではじめ

第1表 戦後思想論争の展開



(本多秋五「芸術・歴史・人間」近代文学、1946年1月創刊号)



第1図 戦後世代論の年次別頻度

知識人論ぐらいなもので(第1表参照),それほど大きな注目すべき論争は全般的に少なかった。そのうえ,安保闘争後の挫折感も影響して,世代論は姿を消して,ジャーナリズム的な青年論がもてはやされ「いまだきの青年は」的な断片的なものが多くなった。しかし昭和41年以後,再び世代論が登場してきており,ヤングパワー,スチューデントパワーなる流行語は世代

て戦前派・戦中派・戦後派という三つの世代の分類があらわれて,世代論は活発に各世代間で行なわれるようになる。しかし,この期の世代論の枢軸となったのは,もはや戦後は終わったとする旧世代の戦争責任の回避に対する新しい世代の追求という形態をとったが,それは太陽族によるエネルギーの拡散となってもりあがりみせるには至らなかった。

戦後の世代論史の中でもっとも注目されるのは何といっても警職法(昭和33年)から安保闘争にいたる時期であろう。数量的にみてもこの期の世代論は著しく増えている。平和憲法の擁護という高い次元からだけではなく若い世代は「デートもできない警職法」を合言葉に,国民の権利と平和を守るためのたたかいに参加した。国民あげての安保闘争は新旧世代に新しい視野を加えることになったが,いうまでもなくそれは国民の権利を守り,平和をかちとるといふ共通するたたかいを組むことができるという点においてであった。しかし,たたかいの過程の中で,世代論はその断絶や問題点をいっそうきざりにすることになった。厳密な意味で世代論が科学(Wissenschaft)にアプローチする姿勢をみせたのもこの時期である。

第5に,世代論が昭和36年以降,急激に姿を見せなくなってしまっているということである。その原因はいくつか考えられるが,世代論にかぎらず思想的な展開は

論を展開させるきっかけを作っている。さらに昭和45年の安保改定期をひかえて,世代論がまた復活登場することは疑いがないように思われる。

以上の諸事実から,われわれは何をひきだし得るか。世代論が展開されてきた歴史の区切れは,激動の時代であり,日本の危機的状況のさなかであった。日本の命運をゆるがす時点で,世代論は必ず現われてきた。そのことは世代論が日本の危機的状況において,重要な役割をになっていることを教えている。すなわち世代論が,戦後日本の社会状況の中に占めてきた位置をわれわれは正当に評価し得る時点に立っているということである。しかも世代論はひとり危機的状況においてのみならず,今日的な状況においても重要な役割機能を果たしうるのではないか。問題は世代論が風俗的・ジャーナリズムの次元であつかわれやすかったことに対する世代論自体のもつ欠点を克服して,歴史の変動期に垣間見る世代の対立・葛藤・緊張を理論的に位置づけることである。

〈注〉

- (1) 本稿では第1表に掲げられた14項目の思想論争の一つ一つについて立ち入ることはできないが,世代論のかかわりあいの中で必要なものについてふれていくことになる。しかし,戦後の区切れを総括的な展望という視点からとらえるためには,ここにあげられた諸論争がいま一度検討されなくてはならない。
- (2) このグラフと第1表とは必ずしも一致しない。それは本稿作成のさい新たに資料をつけ加えたからである。このグラフに示された各年におけるわが国の世代論に関する文献はつぎのとおりである。

## 教育学部紀要 第17号

- 【昭和21年】
- (1) 荒正人「第二の青春」『近代文学』2月(創刊号)
  - (2) 清水幾太郎「街頭の青年たち」『世界』2月号
  - (3) 竹山道雄「失われた青春」『新潮』3月号
  - (4) 清水幾太郎「青年に向かつて」『光』9月号
  - (5) 荒正人「負け犬」『近代文学』12月号
  - (6) 文学時標「戦争責任の追求」(荒正人・小田切秀雄・佐々木基一他)『文学時標』12月号
  - (7) 荒正人「20代の不信」『中央公論』12月号
  - (8) 荒正人「30代の台頭」『朝日評論』1月号
- 【昭和22年】
- (1) 松村一人・小田切秀雄座談会「世代について」『日本評論』11月号
  - (2) 中井正一「地方青年についての報告」『青年文化』11月号
  - (3) 杉捷夫「現代の青年」『文芸春秋』12月号
- 【昭和23年】
- (1) 中村真一郎「僕等の立場から」『群像』2月号
  - (2) 安倍能成・和辻哲郎・都留重人他座談会「世代の差異をめぐって」『世界』8月号
  - (3) 中野好夫「世代論余瀟」『新文学』10月号
- 【昭和24年】
- (1) 加藤周一「アブレゲールとは何か」『新潮』2月号
- 【昭和25年】
- (1) 沖浦和光他座談会「戦争と革命に生きる20代の発言」『人間』2月号
  - (2) 加藤周一他座談会「アブレゲール・アウアングール」『日本評論』2月号
  - (3) 山崎正一「失われた世代」『人間』2月号
  - (4) 中島建蔵「なまいきの悲しみについて」『人間』2月号
  - (5) 飯塚浩二「思想の代的断層」『中央公論』4月号
  - (6) 日高六郎「青年の自画像」『日本人の生き方』(のち「現代イデオロギー」に所収)
  - (7) 向坂逸郎「青年の正義感」『文芸春秋』6月号
- 【昭和26年】
- (1) 向坂逸郎「未来は青年のものである」『文芸春秋』12月号
- 【昭和27年】
- (1) 清水幾太郎「世代の役割」岩波講座『教育』12月号
- 【昭和28年】
- (1) 飯塚浩二「新しい日本人の形成」『改造』5月号
- 【昭和29年】
- (1) 小田切秀雄「世代の裂け目」『世界』2月号
  - (2) 小田切秀雄「転向と世代の問題」『群像』7月号
- 【昭和30年】
- (1) 後藤宏行「アブレゲールの価値意識」『思想』5月号
  - (2) 武田清子「戦後派の思想的履歴」『思想の科学』4月号
  - (3) 吉本隆明「前世代の詩人たち」『詩学』11月号
  - (4) 小原正雄「ティーンエジャー」『世界』11月号
- 【昭和31年】
- (1) 丸山邦男他座談会「戦中派は訴える」『中央公論』3月号
  - (2) 村上兵衛「戦中派はこう考える」『中央公論』4月号
  - (3) 杉捷夫「新旧世代の平和共存」『文芸春秋』5月号
  - (4) 高見順・三島由紀夫他座談会「戦前派・戦中派・戦後派」『文芸』7月号
  - (5) 日高六郎「戦争体験と戦後体験」『世界』8月号
  - (6) 石原慎太郎「僕にもいわせてもらいたい」『中央公論』9月号
- 【昭和32年】
- (1) 日高六郎「世代」岩波講座『現代思想』
  - (2) 藤原弘達「戦後青年の精神形態」『思想』4, 6月号
  - (3) 花田清輝「ヤンガー・ジェネレーションへ」『文学』7月号
  - (4) 鶴見俊輔「戦後日本の思想状況」岩波講座『現代思想』
- 【昭和33年】
- (1) 橋川文三「世代論の背景」『日本読書新聞』1月1日号
  - (2) 江藤淳・加藤秀俊他座談会「『実感』をどう発展させるか」『中央公論』7月号
  - (3) 星野芳郎「敢えて世代の断層に警告する」『中央公論』12月号
- 【昭和34年】
- (1) 石原慎太郎・大江健三郎他座談会「われら民主主義の子ら」『中央公論』1月号
  - (2) 日高六郎・石田雄他座談会「統一の芽をどう育てるか」『世界』1月号
  - (3) 橋川文三・吉本隆明「驚くべき世代の断絶—戦中派の往復書簡」『日本読書新聞』6月1日号
  - (4) 松下圭一「戦後世代の生活と思想」『思想』7, 10月号
  - (5) 佐藤昇「日本の民主主義と戦後世代」『思想』7月号
  - (6) 石原慎三「労働運動と戦後世代」『思想』7月号
  - (7) 高田佳利「ホワイトカラーの戦後世代」『思想』7月号
  - (8) 丸岡秀子他「農村の民主化と戦後世代」『思想』7月号
  - (9) 浅田光輝・橋川文三対談「若い世代と思想の転回」『日本読書新聞』8月13日号
  - (10) 山田宗睦「戦後の終息と思想の転換—戦中派の自己主張」『中央公論』10月号
  - (11) 羽仁進・石原慎太郎・大江健三郎他シンポジウム「発言」『三田文学』10, 11月号
- 【昭和35年】
- (1) 橋川文三「歴史と世代」『現代の発見』
  - (2) 松下圭一「戦後世代論の座標軸」『AAA』1月号
- 【昭和39年】
- (1) 山田趾目「青年労働者と革新政党」『思想の科学』3月号
  - (2) 山田宗睦「比較世代論のための覚え書」『思想の科学』6月号
- 【昭和41年】
- (1) 米山俊直「世代の自然史的考察」『思想の科学』1月号
  - (2) 平田武晴「吉本隆明論の反省」『思想の科学』6月号
- 【昭和42年】
- (1) 竹内真一「世代論と青年保守化論」『戦後日本国民の自己形成』民研論稿
  - (2) 見田宗介「戦後体験の可能性」『現代日本の精神構造』
  - (3) 早坂泰次郎編著「世代論」日本YMCA出版
- (3) しかし、これで戦後におけるわが国の世代論がすべて含まれているというわけではない。新聞、月刊誌、研究紀要等に未発掘の論稿が残されているように思う。このことの実実は今後も心がけておきたい。

## 第2章 世代区分の基準

一般的にわが国の戦後における世代概念の区分は主として戦争体験のかかりかたによって戦前派・戦中派・戦後派という三分類がなされている<sup>(1)</sup>。この分類によれば世代は10年ないし20年という幅をもっており、いわば明治・大正・昭和世代の代名詞としても通用した。ところが、最近では世代区分の幅がきわめて細分化される傾向をみせてきている。たとえば戦後世代についてみると、これをさらにこまかに区分してしまうのである。具体的にいえば戦後世代を第Ⅰ期(昭和5~7年生まれ)第Ⅱ期(昭和8~10年生まれ)第Ⅲ期(昭和11~15年生まれ)というような具合である。そしてそれぞれの世代はつぎのように特徴づけられる<sup>(2)</sup>。

【第Ⅰ期】戦前派のきりひらいた組合運動という民主的な土壌の上で、自分自身をその活動をとおして民主主義的な人間として成長させていこうとする。サークル活動を中心に、戦中派とのコンビによって種々な民主的活動をはなばなく展開し、素朴で小さな実践ではあれ、自らの力で新しい方向を切りひらくことに成功した。

【第Ⅱ期】Ⅰ期生の切り開いたサークル活動の場を最も有効に活かし、また組合活動・家庭生活・社会生活

における近代的民主的自主主張の機能を巧みに身につけていく。

〔第三期〕組合コースやサークル・コースの両方ともに大した関心を示さず、むしろ職場生活を離れた社会生活・家庭生活の地点で、自分自身の生き方を工夫する。

これで見ると、世代の区分は実に2～4年の短かな幅になっている。このように世代の幅が短かくなっていくのは戦後世代論の一つの特徴である。しかし、一般に一世代というのは生物学的概念によって親が子供を一人前の人間とする30年くらいと解釈するのが普通であり、自然である。たとえ世代の幅が短かくなってそれはいずれ15年から10年くらいと考えるのが正しい。ところが、実際には世代の幅は次第にこきざみになっていく。極端な例になると戦後世代は一週間ごとにきりきざまれてしまうことすらある<sup>(6)</sup>。とすれば世代区分の確とした基準をわれわれはどこに求めることができるか、ということが問題になる。上にみられたような世代をこきざみな形で存在させる叙述はここかしこで見ることができる。

福沢諭吉が自伝のなかで「ある時兄が私に問をかけて『お前は是から先き何になる積りか。』と云ふから、私が答へて『左様さ、先づ日本一の大金持になって思ふさま金を使ふて見やふと思ひます。』と云ふと、兄が苦い顔をして叱ったから、私が反問して『兄さんは如何なさる。』と尋ねると、真面目に『死に至るまで孝悌忠信。』と唯一言で、私は『へーい。』と云ったきり其まじになったことがあるが…』と述べた箇所を引用して、福沢諭吉と兄の中に世代の断層があることを指摘した橋川文三は、そこにもまたこきざみな世代があることを認めている<sup>(7)</sup>。

以上にみたような2～4年という切りきざまれた世代区分は、真に世代を見極める正確な基準になるといえるかどうか、がつぎに問題になってこよう。そのような切りきざまれた幅を世代という名称で呼ぶことが妥当なものであるかという疑問が当然のように起きてくる。福沢諭吉の世代だけが「日本一の金持ちになる」ことを考えたわけではなく、彼の兄の世代のなかにもそのような考え方をするものはいなかったらうか。逆に「孝悌忠信」は福沢諭吉の世代の中にも存在したであろう。世代を切りきざんでいけば、その区分基準はないに等しくなるといえないか。世代の幅を切りきざんでいけば世代は消滅して、価値意識の差異のみが残るのではないか。価値意識の差異をみるためなら、世代という概念は全く必要ない。

世代の幅がしだいに短縮化される理由を考えてみると、大きくいって3つの背景がある。第一は、歴史の漸

次急速調（アクセランド）とでもいうべきもので、「人類が木の枝を生産の手段にした時期は、人間が電気動力による生産手段を使用している時期よりはるかに長い」という現実である。「いっばんに歴史の尺度は、原始から現代に下降するにつれてその目盛りをこまかにしている。この点では世代という尺度も例外ではない<sup>(8)</sup>。」

第二は、戦後20年の物質的基盤の変化が有無をいわず新しい世代を輩出するということである。オートバイ、カー、エレキなどが若い世代にどのように浸透していったかをみるとよい<sup>(9)</sup>。

第三に、戦後ジャーナリズムによるこきざみな世代の創出。失われた世代、錯乱した世代、不信の世代、怒れる世代、懐疑の世代、無気力な世代等々。年や月の単位はまだいいほうで週刊誌ジャーナリズムは週きざみで世代を生み出していく<sup>(7)</sup>。

これら三つの理由によって、世代区分の基準がしだいに切りきざまれていくことを一応裏づけはするが、そのような切りきざまれた状況のなかで、なお世代という概念が有効な尺度となりうるということを証明するには充分ではない。ジャーナリズムや物質文明がつくりだす世代は、いってみれば世代としての役割機能を喪失した虚構世代にすぎないのではないか。虚構世代といま一つの「世代」とをはっきりと区別することが大切である。こきざみな世代の多くは虚構世代であって、これをいくら積み重ねてみたところで、その総体は世代の本質に迫るものにはならない。

世代という概念はいままでもなく、原初的には生物学に拠るものである。これを人間社会についていえば、人間が生まれてから子どもを持つまでの期間が平均30年であり、人間が成長して親の仕事を継ぐまでが30年、さらにその仕事を次の子どもに譲るまでが30年というように、一世代のもつ幅がおおよそ決まっています<sup>(8)</sup>、2～4年というようなこきざみなものではないということになる。

明治以降の近代史で最初に世代交代の要求がでたのは1887（明治20）年だという<sup>(9)</sup>。この年、徳富蘇峰は明治国家を創設した「天保ノ青年」にかかわって「明治ノ青年」が「本邦第二ノ精神革命」をなすべきだと主張したのであった。福沢諭吉・西周・森有礼といった思想家に抗しこれにかかわって北村透谷・徳富蘇峰・西田幾太郎・島崎藤村・田岡嶺雪・高山樗牛といった青年思想家があらわれてきた。そのうち20年後の1907（明治40）年ごろになって、水野幸徳や堺利彦ら社会主義一期生をつぐ、大杉栄や山川均ら二期生があらわれる。さらに、それから20年、1925（大正末～昭和初年）前後にはマルクス主

義にめざめた青年が出現する。治安維持法で起訴されたものの平均年齢はちょうど25歳であったといわれる。

こうした例は世代の幅が決して切りきざまれたものではないということを如実に証明する。しかし、ジャーナリズムや物質文明がつくりだす切りきざまれた世代を虚構世代として片付けてしまうことができるとしても、歴史の漸次急速調は否定しえない事実であり、この事実がある以上は、ある程度こきざみになっていく世代が存在するというのもわれわれは認めなくてはならない。すなわち世代区分の基準をわれわれはいまや時間というただ一本の軸だけで済ませることができなくなっているのではないか、もっと別の軸が必要になっているのではないか。

戦後、わが国の世代論は、いわば先人の残した文化価値遺産をひき渡そうとする古い世代と、それを引き継ぐ若い世代のディスコミュニケーションがきわだって大きく、その継承があやうくなった時期に展開されてきた。古い世代と新しい若い世代とが断層を生ずることなく、スムーズに引き継がれるならば世代論は必要なかったであろう<sup>(10)</sup>。しかし、古い価値体系と新しい価値体系とは必然的に葛藤を生じる。いかに新しい文化・価値の体系であると旧世代が考えていても、若い世代にとってみれば、それは既成の旧秩序として彼らを拘束する古いものでしかない場合がある。世代の交代に多かれ少なかれ保守の性格が含まれるのはしたがって故なきことではない。これまでのわが国の戦後に展開された世代論の中には、世代間の断層にのみ焦点をあわせ、文化価値遺産の伝承・継承の機能と性格について論じたものはあまり多くはなかった。そのことが、いっそう世代論を視野のせまい、ジャーナリスティックなものにしてしまったとも考えられる。

文化価値遺産の継承は社会的・経済的支配権を握る成人(The Older)がその支配をうけている若い世代(The Younger)へ、権威を一部づつ断片的に移譲するという形をとるのが普通である。世代論が若い世代からではなく、成人世代からなされるのは、自分たちが受け継ぎ、つくりあげてきた文化価値遺産をできるだけ損わないよう、そっくり若い世代に伝えるための「解説」あるいは「ガイドブック」だからである。こうした形態は、当然若い世代から反発される。とくに反体制志向にこの反発が結びつく場合、それは運動として組織され、実践的にも理論的にも高い水準で生起される。体制順応志向の場合には、まったく摩擦を生じないか、あるいは逸脱行動をとりながら合理化機制となり「みんな社会が悪いからだ」という形をとる。

それゆえに、世代区分のいま一つの基準は世代継承にとまらぬ社会運動的な側面をとらえることである。換言すれば、歴史の大きなうねりは時間を軸とする世代とともに、社会的な概念としての世代をも押しだす。たとえば戦争という歴史のうねりは、明治・大正・昭和の世代とともに戦前派・戦中派・戦後派という世代を押しだした。最近はまだ、戦前・戦中・戦後という社会的概念を軸とする世代が姿を消して、明治・大正・昭和世代の名が語られている<sup>(11)</sup>。

時間を軸とする世代区分の基準はかくして歴史の静的な進行のなかにみられ、どちらかといえば生物学にいう世交代としての比較的幅をもった区切りであり、社会的な概念を軸とする世代区分は、時として切りきざまれたものとして用いられ、特殊的性格を持ったものとして提起される。したがって切りきざまれた世代もこうした観点から、当然認められなくてはならないが、ききにふれた虚構世代とは明確な一線をひいて区別することが大切である。いうまでもなく虚構世代は風俗の次元にのみかざられ、いたずらに世代間の断層・分裂のみを強調する。世代論の本質はまず世代間の伝承・継承のメカニズムを明らかにし、そこにおける矛盾を発見することであり、いたずらに世代間の断層・断絶を強調しさらには一方の世代の立場のみを強調することにあるのではない。

#### 〈注〉

- (1) 世代がこのように戦前派・戦中派・戦後派というようにいわれたのは昭和31年のことであり、最初には戦中派という言葉が大宅社一が使い(遠藤周作他座談会「戦中派は訴える」『中央公論』昭和31年3月号)、これがきっかけとなつて戦前派・戦後派という言葉がこれ以後つけ加えられた。
- (2) 高田佳利「ホワイトカラーの戦後世代」『思想』昭和34年7月号43ページ。
- (3) 鶴見俊輔「戦後日本の思想」岩波『現代思想』Ⅺ 昭和32年 57～58ページ。
- (4) 橋川文三「歴史と世代」『現代の発見』昭和35年 158ページ。
- (5) 山田宗睦「比較世代論のための覚え書」『思想の科学』昭和39年6月号 56ページ。
- (6) 米山俊直「世代の自然史的な考察」『思想の科学』昭和41年1月号 44ページ。この説は世代論を風俗の次元にみごとに照応させている端的な例といえるだろう。
- (7) 鶴見俊輔、前掲。
- (8) 清水幾太郎「世代の役割」岩波講座『教育』昭和27年。
- (9) 山田宗睦、前掲、56ページ。
- (10) 私はこの意味で世代論は教育、とりわけ社会教育に不可欠な視点を提起しようと考えている。具体的にいえば、戦争体験をどう若い世代に引き継ぐべきであるかという課題は戦後未決の問題点の一つであるが、これを有効にとりあげるのは社会教育がもつとも近い領域である。詳しい検討は本稿の課題ではないが、本研究はそのための前提的取り組みである。他日を期したい。
- (11) たとえば昭和41年1月9日朝日新聞社説「明治生まれと昭和の世代」。昭和43年5月8日毎日新聞は「大正トップ時代」の記事をかかげて、明治世代から大正世代に経済界の世交代がなされていると報じている。

### 第3章 世代論の性格

#### 第1節 世代論の位置づけ

世代論を系列的に整理してみるとおよそ4つのカテゴリーに分類される。

(1) 主として社会学を中心とする学問的分野でとりあげられてきた世代論<sup>(1)</sup>

(2) 知識人のあいだで展開された世代論

(3) アブレ・ゲールとか太陽族とかいう名のもとでくりひろげられた風俗的世代論

(4) 民衆の生活と感情とイデオロギーのなかに実質的に定着した世代間の断層をめぐる世代論<sup>(2)</sup>

これら4つのカテゴリーはそれぞれにまたがって共通する領域を含んでいるが、わが国における戦後世代論の性格をほぼ包括しているとみてよいであろう。ところで、こうした世代論のカテゴリー化によって、世代論が社会理論としての市民権を得やすくなるという期待はいっこうにもてそうもない。わが国における戦後世代論をめぐる評価は、とくにそれが社会理論としての位置づけという問題になると、かなり低いものといわなければならない。

世代論を社会理論としてとりあげたディルタイやマンハイムの先駆的業績があるにもかかわらず、わが国においてはそれに匹敵する評価がまだに与えられていない。ディルタイは世代を精神科学の方法概念として重視し、感受性の最も鋭い時期になんらかの共通な歴史的体験によって強く貫かれ、その作品にその歴史性が濃厚に反映しているような人々として世代をとらえた<sup>(3)</sup>。それをひき継いだマンハイムは歴史的影響の同一性を基本的な観点として、世代を(1)世代の状況(Generation lagerung)(2)世代の関連(Generationszusammenhang)(3)世代の統一(Generationseinheit)の三つに分けて、世代の社会的・歴史的重要性を指摘した<sup>(4)</sup>。ディルタイやマンハイムは世代論を一般的な事象から完全に抽象化した次元で論じたのであり、その限りでは社会理論としての高い位置を確保しておくことが可能であった。しかし、これまでに概観してきたごとく、戦後の世代論は現実特殊なレベルにまでおろてこなければならなくなっていた。そのことが、第2から第4までのカテゴリーの拡大を生じさせたのである。その結果、世代論は、階級その他さまざまな要因で起こってくる社会的対立や差異を世代という概念で一色にぬりつぶしてしまう、という批判をうけることになり社会理論としての機能を果たしえないとする意見がきわめて強くなって

いった。そのような中で「このような批判の原則的な正しさを認めたくて、しかも日本では世代論は現実的な効用がある」と主張した人々はごく少数でしかなかった<sup>(5)</sup>。まして風俗の次元から問題にされるが多かった世代論を社会理論としてとらえ直し、これを厳密な検証にたえうるものとして理論的に高めようとする作業は困難を極めたといつてよい。たとえば、次にあげる例は、同じ戦後世代を見ていながら、その評価が全く異なっている好例である。「アブレゲールは体制の崩壊を目撃し、新しい民主主義思想の導入に目を輝かせ、戦犯追放、共産党合法化、農地改革、憲法改正、2・1ストのみならず敗戦による社会的混乱——復員、闇取引、インフレ、特攻隊くずれ、街娼、新興宗教、さらに食糧メーデーにあらわれたような飢餓そのものを生き耐えてきた<sup>(6)</sup>。」ここにみられる戦後世代は激動と混乱の嵐の中をくぐってきたえられてきたたくましい世代として描かれ、期待のかけられる世代として位置づけられている。

それと対照的な戦後世代に対する解釈はつぎの表現から読みとることができる。「戦後、いわば常識的に、すくすく伸びてきた民主主義勢力、平和勢力は最初の重大な試練に直面しているといえるだろう。戦後の民主主義運動や平和運動も、もちろんさまざまな抵抗を排して伸びてきたもので必ずしも「すくすく伸びた」とは言えないかもしれないが、それにしてもおかれていた条件は戦前とはまるで違っていることも事実である。(中略)戦後の世代は、戦前の世代のような残酷な試練はうけていない。のびやかではあるが、まだひ弱いと言わなければならない<sup>(7)</sup>。」ここでは戦後世代に対する評価は「ひ弱さ」である。このように、同じ世代ひとつをとっていても解釈や理解のちがいがあり、そのことが世代論をいっそう歪みのある複雑なものにしてしまうということになる。世代論が社会理論としての通行証をもつためには、まだ多くの問題が残されているといえるだろう。

#### 第2節 戦争体験と世代論

戦後わが国の世代論を明確に特徴づけているのは、戦争体験である。世代の形成は戦争をどのような形で体験してきたかということでもかなりちがってくる。銃弾の飛びかう中で明日をも知れない生と死の対決を体験した世代、青春を銃後の暗い灰色の社会にすごした世代、そして「お国のために戦っている兵隊さん、たちのためにせつせつと日の丸の旗を無心に振った世代、戦争がこれらの世代に落とした影は、くっきりと世代間のちがいをうきだたせた。戦後の世代論が、戦争体験を軸として展開されたことは、けだし当然のことであって、とくに戦後日

本の建て直しをはかろうという観点から戦争責任を追求する姿勢が生まれていた。日本が文字どおり、新しい日本として生まれ変わるためには、戦争責任の徹底的追求が不可欠の課題であった。それは戦争を引きおこしたのみならず、それに協力したもの、沈黙していたもの、抵抗したもののあらゆる立場のあらゆる階層が、徹にあらいだらい国民すべての前に出されなければならないのであった。そうした批判と追求の過程から新しい日本の誕生が期待されたはずであった。戦争をめぐる深い傷跡を容赦なく掘りおこし、再び同じわだちを踏まないために、人々は若い世代にその歴史的教訓を伝えるという課題を担わされていたのである。

戦後の混乱の中で、敗戦を「解放」として感じとった人々は、しかしながらごく少数にすぎなかった。大多数の国民は、戦争の終結を喜びながら目前の生活現実からくる不安にうちひしがれていた。したがって戦後直ちに戦争責任を追求する火の手をあげ得たのは一部の人たちにしかすぎない。しかし、その追求の姿勢は、当時においてもかなりの支持をうけた。

「本土決戦、一億玉砕という自暴自棄の作戦(!)に駆りたてられてきた善男善女は、無条件降服の詔勅が発せられる直前まで、集団自殺を覚悟していた。空襲に際しては、あのごみ棄て穴にもおとる防空壕の片隅に掛け替えのないのちを託してきたのだ。」「天皇陛下万歳、と、奴隷のこぼを叫んで生を了えることのできないものにとって過去数千日の戦争また戦争の期間が、生きながらの地獄であった」という体験をしたのは30代の人たちであった。彼らは「絶望を知り、深淵をくぐり、虚無の世界をかじった。わたくしち30歳代はそれゆえにこそ、かえってこの人生をいとおしむことができるのだ」と考え「第二の青春に捧げる犠牲を惜しむことなかれ、！」と新しい日本の建設に立上る決意を示したのであった<sup>(8)</sup>。この世代の人々は戦争責任に対する怒りをもっとも強くもっている。「私たちは戦争に感情をすり減らして泣かなくなった(あるいは笑いもなくなった)世代だといわれるそうである。それはあるいは事実かもしれない。しかし、天皇とそのために死んだ多くの人たちのことを考える時、私は不甲斐ないことだが思わず声がふるえてくる。九死に一生を得て、今は平和なサラリーマンである歴戦のパイロットなどと一緒に飲んでその晩寝つかれなかつたりすると、私は死んだ戦友たちの顔が目の前にちらついていっそう眠れなくなる。彼らのためにも、私はたたかわなければならぬ、とそんな時私は思うのである<sup>(9)</sup>。」このような戦争の体験にかかわるちがいにもかかわらず、戦争責任の追求の火ブタがこれらの

世代によって切られたことは自然のなりゆきであった。

「一般に40代の旧進歩人は、自分より以下の世代の人びとが、戦争中、西も東もわからぬままに流されていたかのように想像し、発言もしているが、とんだ間違いである。戦争に対する抵抗はいろんなかたちで敗戦の年にいたるまで試みられていた。非合法グループ活動も続けられていた。ことに進歩思想の一端にふれていた30代の連中はそういったかたちで、自分を守り、伸ばしてきたのである。むしろ旧進歩人のほうが、見苦しく姿勢を崩してしまった<sup>(10)</sup>。」たとえば「かれは戦争が始まる前にはあるペンネームを使っていたが、反動時代にはべつのペンネームで戦争にお辞儀をした文章を書き捲っていた。こんどはまた以前の名前にもどって、クロボトキンまがいの青年に宛てた文章を書こうとしている。」という実例をあげている<sup>(11)</sup>。戦時中は戦争を賛美し、戦後は民主運動指導者へのみごとな「転進」という現実をまのあたりにしたこれらの世代は深い失望と怒りを感じざるをえなかった。「若い世代は自分たちの責任で自分たちの道を発見することだ。自分たちの幸福は自分たちの手で獲得することだ。同時代人としての新旧世代の協力がなされるのは、むしろそのあとではなからうか<sup>(12)</sup>」この言葉ほど旧世代に対する不信をはっきりと表わしたものはない。

戦争責任に対する追求の最も大きな欠落は戦争の最大の犠牲者であり被害者であった国民、正確に言えば労働者、婦人層が欠けていたことである。なるほど知識人・文化人による戦争責任の追求は多数にのぼったが、それが大衆の中に入りこみ、討論されるという機会はずほとんどもたれなかったのである。このことは戦争責任が国民的課題として取り上げられる場や機会を失わしめてしまったことを意味する。婦人・労働者の戦争体験が戦後日本の再生に活かされるような体系だった思想に転化させられることもなく、一部階層の間でのみ戦争責任が論じられたのである。戦争による最大の犠牲を強いられた婦人・労働者の容赦のない批判と追求が高まれば、それだけ旧世代は返り咲きをはばまれ、新しい世代による社会建設のツチ音がふるわれたことであろう。ところが事態は、旧世代を中心にゆるやかに進行していた。彼らは戦争責任を追求する声に、完全な「沈黙」をもって応えていた。そしていっほうで身の保全をはかりつつ、指導者のイスにたどりつこうとしていたのである。そうした旧世代の極めて少ないつぎの発言は、当時の旧世代の考え方をそのまま反映したものであった。「そうです、責任はいかにも私達にあります。しかし、今25歳の若者は5年たてば30歳、10年たてば35歳です。敗戦後もう2年半

たつことを考えれば5年、10年はまたたくうちです。あなた方はすぐ責任ある位置につかねばならないのです。

(中略) いつまでもおやじの借金だから、おれは知らんとは言っていないのです。よかれあしかれ、自分はいりこんだ現実のなかで生きぬいていくより仕方がないのです<sup>(13)</sup>。」

過去は過去、今は今と割り切らせることで本質を陰蔽しそれによって戦争責任の追求から逃がれようとするこうした態度は、旧世代の一般的、かつ典型的なパターンである。昭和32年、戦争推進の立役者であったA級戦犯が、囚人服をかなぐり捨てて、わが国の首相になったことに象徴されるごとく、戦争責任は国民的課題として解決されることなくほうむりさられようとしている。今日なお、戦争責任の追求は世代論の課題としてばかりではなく、国民的課題として未決のままもち越されておりこの課題の解決なしに「戦後は終わった」ということは決してできないであろう<sup>(14)</sup>。

戦後の世代を戦前派・戦中派・戦後派というように呼びはじめたのは、既述の如く昭和31年を境としてである。この分け方は何を基準にしたかという点、いうまでもなく「戦争体験」であって「戦争責任」ではなかった。「戦争体験」が世代区分の軸にすえられることによって、その比重はどうしても戦前派と戦中派にかかざるをえなくなる。間接的・伝聞的戦争体験しかもたない若い世代はその発言権を控えざるをえなくなってしまうという状況がすでにそこに作られる。いっぽう「戦争責任」が世代区分の決定軸になれば、事態は逆である。若い世代＝戦後世代は歴史の審判者として、旧世代に厳しいツチを打ちおろす役割をもつことになる。しかし、「戦争体験」を軸にして展開された世代論は、結局、戦前派・戦中派の合理化機制としてはたらし<sup>(15)</sup>、彼らがやがて社会復帰がかなえられるようになることでしだいに下火となり、戦争責任に対する追求は戦後世代の未熟さに対する批判と訓戒に転化していったのである<sup>(16)</sup>。

### 第3節 戦後世代

戦後世代をとくに戦前派・戦中派世代から切り離して述べるのは、それが特異な性格を備えているからである。戦後まもなくアブレゲールという呼び方で一括された戦後世代は解放はされているけれども道義感がない、秩序をもっていない、ものごとをスッキリ割切るといふように特徴づけられた<sup>(17)</sup>。東大生で光クラブの山崎晃嗣社長の自殺は当時、アブレゲールの典型といわれた。また昭和30年以降の戦後世代は「終戦後の危機のおさまったのちに新憲法と六三三制の教育のもとで育ててきたいわば純粹戦後派」と名づけられ、その特徴は「鋭い人権

感覚、身近な人間関係における民主主義、ためらいのない自己主張、農本的勤労意識から解放された楽しみへの追求と私生活の尊重、合理的な生活設計、私生活と公生活の分裂(偽善)のないこと、集団生活への自然なとけこみ、カリスマ的権威の否定と実感の尊重といった近代的・民主主義的気風を自然に身につけている」というのである。そして、戦後世代にとって、民主主義は「戦前派におけるように追求すべき理念ではなく、戦中派や初期戦後派のように抵抗によって獲得されるものでもなく、日常的な感覚であり、行動原理」だとされる<sup>(18)</sup>。戦後世代のこのようなきわだった特徴は、生活態度の変化をみることによって容易に理解することができる。(第2表参照)

第2表 生活態度の変化 (%)

調査者	文部省		佐藤他2氏			
	昭和5年		昭和15年		昭和25年	
	学生	社丁	学生	社丁	中学	高校 大学
1. 働いて金持ち	5.4	18.6	1.0	8.7	6.8	11.2 1.1
2. 勉強して名声	12.0	8.8	7.2	5.0	8.5	9.7 11.4
3. 趣味にあう暮らし	25.5	12.2	7.3	5.4	29.6	58.8 44.3
4. 平凡で呑気	3.8	3.5	1.5	1.2	7.2	12.8 14.6
5. 正義を貫徹	30.3	32.6	37.6	49.9	51.5	16.5 16.2
6. 公のため犠牲	26.9	24.2	34.1	30.1	14.0	10.2 12.4

佐藤幸治「愛国心」『現代道徳講座』第5巻所収 昭和29年 176ページ

ここにあげられた戦後世代の評価は、かなり好意的であり、次代を担う世代として積極的な役割をはたしうるものとして解釈されている。こうした評価が果たして妥当なものであるか、どうか。その検討を戦後世代の一事例を通して行なってみることにしたい。

戦前派・戦中派が政治・経済・言論社会の指導・支配的地位に復帰することによって戦争責任の追求という国民的課題があいまいさを残してきた経過については既述のとおりである。それゆえに、新しい戦後世代の任務が新しい日本再建の構成員となるべき位置を追われて、旧世代によって指導的・支配的対象に転化させられた歴史的な経過についてもすでに前節で述べてきたとおりである。こうした状況のもとで、戦後世代は心の中に積み重ねられた不満の吐け口をさがし求めているのである<sup>(19)</sup>。そのようなときに小説「太陽の季節」(昭和30年)が芥川賞をうけ、全国的な太陽族ブームをまきおこした。著者石原慎太郎は20歳をこえたばかりの青年であった。世代的にみたかぎりでは純粹な戦後世代である。このブームの波に乗った彼はあいついで戦後世代としての発言をする。「若造が何を生意気などと言われるだろうが、その「生意気」を大切にしたい。大人の気にさわるこの放埒は大事にしよう。大人が僕らに抵抗や敵ガイ心うんぬんというのは向こうの一人勝手な観念の設定に過ぎはし

まいか。僕は彼らにただ異質なものを感ずるだけなのだから」「何を、どうしてするかということよりも、どれだけやれるかということ念頭に『生き、たい。何故という決定を下す他の何も僕らは信用しまい。それは自分の実感で決めればよいのだ。その結果、僕らの採った針路がホウラツ、安易な抵抗、あるいは逃避、何といわれようとかまうものか。その中で人間の喪くした価値というものをもう一度とり戻すのだ』<sup>(20)</sup>。」

こうした彼の発言は青年層の当時の不満を背景として形づくられたものであった。しかし、実際には、青年世代が共鳴したのは、石原氏の思想や行動ではなく、それまで旧世代によって何一つ発言の機会を与えられなかった青年世代がようやく部分的にでも社会に浮上することができたという一種の「解放感」であった<sup>(21)</sup>。

この期は戦後およそ10年をへて、世代交代のきざしがあらわれた時期といえる。すなわち社会自体が世代史的な流れの中で、必然的に新しい世代の抬頭を必要としていた時代だったということが出来る<sup>(22)</sup>。しかし、戦後の世代が公的に発言する場を与えられたのはごく一部にしかすぎず、しかも「実感派」が中心となったこれらの世代は、戦争を「プロ・レスリングのタッグマッチ<sup>(23)</sup>」にたとえていることに象徴されるように、国民的課題としての戦争責任の追求はおろか、新しい日本再建に対する積極性すらも期待できない状態だったのである。

石原氏が得意気に、自分の作品は「与太学生よりもむしろ貧しいセンパン工や若い漁師たち」に「純粋な共感」を寄せられているのだと語っているが、こうした世代の「生活の内を抱いている、自らは形としてつかめぬ抑圧・反感・不信」が彼らに理解されているといいながら、石原氏は結局のところ、彼が何をしたいのか、どうすべきなのか「よくわからない」としか言えないのである<sup>(24)</sup>。われわれがここで注意すべき点は、戦後世代のこうした抬頭が、マス・コミによってつくりあげられ、真の戦後世代は全く抑圧されたままにされているということである。マス・コミによってつくりあげられたこの世代は、かくして「憲法改正、再軍備反対、左派社会党へ投票する<sup>(25)</sup>」と宣言しながら、やがてれっきとした保守政党のタレント議員としておきまりの反動コースを着実にたどることになる。その特質構造はA級戦犯が一国の首相に返り咲くという、日本特有の現象と全く次元を一つにしたものとみるべきである。

これまでの考察によって、われわれはつぎの教訓を与えられる。第1にきわめて当然のことであるが戦後世代に対する評価はマス・コミの次元によるものではなく、現代日本の国民的課題の次元によって評価されるべきものであること。第2に戦後世代の特徴としてあげられた諸

点については、これからもいっそう厳密に検討を加えなければならぬということであり、第3に戦後世代の成長はかなり危機的な状況におかれているということである。第1と第2については以下の章にてふれるが、第3についていえば、解放感情が必ずしも反体制的志向をもつものではない<sup>(26)</sup>ということをつけ加えておく必要がある。大人への反抗や既成権威に対する否定が体制内の志向に移行しやすいことは上の事例ではっきりと示された。戦後世代論に対するさまざまな次元での評価は、むしろ今後の重要な課題というべきであろう。手放しの賞賛や放任、さらに世代間の対立と断層、ここにも未決のとり残された世代論的課題がある。

#### 〈注〉

- (1) 早坂泰次郎「世代論」日本YMCA同盟出版部 昭和42年 22ページ。
- (2) (2)以下(4)までの分類は日高六郎「世代」岩波講座『現代思想』昭和32年 127ページ。(のち「現代イデオロギー」勁草書房に所収)
- (3) Dilthey "Über das Studium der Geschichte der Wissenschaften vom Menschen, der Gesellschaft und dem Staat" 1924. (大橋幸「世代」『社会学辞典』有斐閣 昭和33年 544ページ)
- (4) K. Mannheim "Das Problem der Generation" 1928. (鈴木・田野崎訳「世代・競争」誠信書房 昭和33年)
- (5) 日高六郎「戦争体験と戦後体験」『世界』昭和31年8月号 51-52ページ。この他に世代論の重要性を指摘する人々はずつぎのようなメンバーであった。杉山英樹、清水幾太郎、藤原弘達、松下圭一、佐藤昇、米山俊直、山田宗睦。なお各氏の論文については各注を参照されたい。
- (6) 松下圭一「戦後世代の生活と思想」『思想』昭和34年7月号 14ページ。
- (7) 星野芳郎「敢えて世代の断層に警告する」『中央公論』昭和33年12月号 129ページ。
- (8) 荒正人「第二の青春」『近代文学』昭和21年(のち「戦後思想の出版」筑摩書房 昭和43年に所収)
- (9) 村上兵衛「戦中派はこう考える」『中央公論』昭和31年4月号 26ページ。
- (10) 荒正人「20代の不信」『中央公論』昭和22年12月号 42ページ。
- (11) 荒正人「第二の青春」掲掲。こうした例を「かれ」とか「某」とかという形で書くことは、道義的節操としてふさわしいのかも知れないが、事実を明らかにする、真理を追究していくという姿勢とはまるで別の問題である。われわれの世代は事実を事実として知るために、このようなあいまいな表現は決してするべきではないと考える。このことは戦争責任がいま一度はりおこされなければならないという課題にとつて重要な問題である。思想の科学会編「転向」(上・中・下巻)や本多顕彰「指導者」(光文社)は、その意味でわれわれに残された数少ない資料である。
- (12) 荒正人「20代の不信」45ページ。
- (13) 杉捷夫「現代の青年」『文芸春秋』昭和22年12月号 27ページ。
- (14) 戦後は終わった。という言葉が論壇で使われたのは、敗戦から10年をへだてた時点においてである。中野好夫「もはや、戦後ではない」『文芸春秋』昭和31年2月号。石田雄「戦後は終わった」ということの意味」『中央公論』昭和32年10月号などを参照。
- (15) たとえば戦前派は「今から考えると成功意識が非常に強い。それがまた縄張りや序列を争う意識にもつながっている。(中略)あいつは戦争中に協力した、あいつはうまくやりやがった、あいつはああ言うけれども、あいつだつてやつていたじやないか、という競争意識と罪の意識が渦巻くのです。これが戦前派の間での戦争責任の追討の仕方です。」(大宅壮一・座談会「戦中派は訴える」『中央公論』昭和31年3月号 100ページ)また戦中派では「個の責任というようなものは、あるようなものはあるような気がするんですが社会に對

## わが国における戦後世代論の展開と課題

する責任といいますが、あるいは今日の戦前派の人たちのような責任、そういう責任を感ずる必要はない。」(村上兵衛・座談会「戦前派・戦中派・戦後派」『文芸』昭和31年7月号 42ページ)

- (16) その意味でも「戦争責任」に対する追求は人民的課題として再発掘されなければならないが、最近の傾向は「戦争責任」を通りこして「戦争体験」の伝承に力点がかけられるようになってきた。そのこと自体は悪いことではないが、戦争の悲惨さを伝承する努力はそれが個別的体験、特殊状況下の体験という形ではなく、歴史の流れのすじみちとしてはじめて実を結ぶものとなる。「戦争体験」の強調が問題を歴史的本質からそらしてしまう傾向をもたらしやすいことはあらためて論証するまでもない。たとえば『暮しの手帳』昭和45年夏季(96)号は特集『戦争中の暮しの記録』をとりあげている。これは、それまでエンピツをにぎつたことのない老人までもが当時の苦しかった体験などを雑多に集めたもので、文字通り、「戦争体験」の生々しい記録である。しかし、この血と涙でつづつたであろう市井の人々の赤裸々な「戦争体験」を読んでみると個々の体験はよくわかるが、「戦争のあいだ、ただ黙々と歯をくいしばって生きてきた人々」(同書 編集者のことば 53ページ)が、まさに「黙々と歯をくいしばって来た」その本当の姿は少しも明らかになれない。それどころか、かえって「戦争体験」の強調が「戦争責任」の視点を欠落させているといつてよい。こうした一見、庶民とか「名もない人々」の立場に立っているかのように見せかけながら結局は戦争の本質をくぐりぬけさせない態度は、戦争を正面に押し出し、生活の苦しさのみをとりあげることで、肝心の戦争責任の追求のホコ先をかえてしまうのである。「戦争体験」は「戦争責任」をふまえたうえでじめて歴史的認識に位置づけられるのである。
- また、戦後未決の論点としてのこの「戦争責任」論については、いわゆる文化・知識人がさももつともらしく多くの問題を提起している(その概況は第1章第1表参照)が、ここではそれについて述べる余裕がないので、主たる論文については山田宗隆「戦後論争の年表的な目録」『思想の科学』昭和31年1月号の資料を参考にされた。私自身の考えではこれらの文化・知識人の「戦争責任論」も「戦争責任」追求の具体的な実を含み得てであろうと考えている。なお、岩手県農村文化懇談会編『戦後農民兵士の手紙』昭和36年、岩波新書および菊池敬一・大年羅良編『あの人は帰つてこなかった』昭和39年、岩波新書は、「暮しの手帳」と同じ「名もない人々」の「戦争体験」のリアルな記録集であるが、「戦争体験」を個人体験に終わらせることなく、日本人民全体の問題としてとらえていこうとする志向性をもっている点で高く評価されるべきものである。
- (17) ぬやまひろし・加藤周一他座談会「アブレゲール・アヴァンゲール」『日本評論』昭和25年2月号。
- (18) 佐藤昇「日本の民主主義と戦後世代」『思想』昭和34年7月号。
- (19) 「そうですね。ぼくたちの世代にはなにか、ぼつかりと空洞(あな)があいてあるといふ感じがですね。ぼくらは会合などといふとはなしに、みんな集まつてきますね。さうして、わあおあ騒ぐのですよ。(中略)だがその後がいけませんね。(中略)何といふかなあ。やつぱり、まや切れねえ、といふ感じがですね」『空洞がぼつかりあいてあるといふのはプリンシプルを喪失してあるといふことだね。理想を喪失してあるのだ。(中略)みんななにかに追い立てられてあるのだらう。(中略)だから、それに追いつてられて、何かをつかもうと焦るのだ。ある者は教会へ行くし、ある者は共産党へ行く、ある者は光クラブでも、女遊びでも何でもやるのだ。(中略)空洞を何とか埋めようといふのか、あるひは、空洞をみてみないふりをしようといふことか、とにかく今の若い連中は手当たり次第にしゃにむに駆り立てられてあるやうに見えるよ。」(山崎正一「失われた世代」『人間』昭和25年2月号 25ページ)
- (20) 石原慎太郎「私の文学観」『朝日新聞』昭和31年1月25日号。
- (21) 「青年のあいだでは『太陽の季節』はそれほど評判はよくない。しかし青年たちの会話のなかに大人が加わって『太陽の季節』を非難すると、青年のあいだに微妙な変化があらわれる。彼らは『太陽の季節』を弁護するがわりに回ろうとする。『太陽の季節』には共感しないが、そのなかの『解放感情』にたいしては、青年は共感的なのだ。」(日高六郎「戦争体験と戦後体験」『世界』昭和31年8月号 55ページ)
- (22) この期には江藤淳、大江健三郎、曾野綾子、加藤秀俊らがほぼ同じころに台頭してきた。いずれも20代である。
- (23) 「要するに、ぼくなんかの形では、戦争というものはプロ・レス

リングのタツグ・マツチと同じようなものでね、戦争がぼくなんかに持っている影の大ききさというものは、全然ないですね。」(石原慎太郎他座談会「戦前派・戦中派・戦後派」『文芸』昭和31年7月号 55ページ)

- (24) 石原慎太郎「僕にもいわせてもらいたい」『中央公論』昭和31年9月号。
- (25) 石原慎太郎「朝日新聞」昭和31年6月25日号。
- (26) 「解放感情は、社会主義体制は是非かという体制意識とも、どの政党を支持するかという政治意識とも直接にはつながらない。」(日高六郎、前掲、56ページ)

## 第4章 戦後世代論の課題

### 第1節 世代の断層

世代論が一つの社会理論としてとりあげられるのは、世代間に歴史における主体的参加の仕方のちがいによる世代形成が行なわれ、しかもその形成された内容が、歴史の変動にもなって、世代間に感覚・体験の差異をもたらすからである。これを世代の断層と、ふつうわれわれは呼んでいる。世代の断層は旧世代と新世代の文化価値遺産の継承に時として大きな障害となり、社会的混乱を生起せしめる要因をつくりだす。

わが国において世代の断層が問題となったのは民主主義の危機的状況においてであった。朝鮮戦争、三鷹・松川事件、労働組合の分裂、安保条約の発効と破防法、M S Aと秘密保護法、教育二法、動評、警職法にみられる反動化の嵐は、戦後民主主義の洗礼をうけ、6・3制教育を終えた戦後世代をもまきこまずにはおこななかった。治安維持法のもとで暗い生活を送り、あげくの果てに戦争によって肉親・友人を殺された極限状況としての生活を体験してきた旧世代は、ようやく歩みだした民主主義を何が何でも守りぬこうとし、暗い時代の復活を何とか防ごうと考えた。この世代の民主主義感覚はこうした治安維持法と戦争という体験によって固められていた。いっぽう新しい世代は「戦争の悲惨さについての体験も、国家機構や社会制度のラディカルな変革を伴った敗戦の体験ももたず、戦後体験、それも相対的に安定した時期の体験しかもたないために、挫折の経験を知らない明るさをもつ反面、大衆社会現象の浸透と相まって伝統型とは異なった意味で体制埋没的などころがあり、自由や人権の感覚の視野が比較的狭小で、身近かな人間関係をこえてひろがらず、体制批判が弱い<sup>(1)</sup>。」思ったことをためらいなく主張するが、それは生活をくずさないペースで行なわれる。また組合活動をやりながら、会社の主催行事にも積極的に参加してはばからない。こういう世代に、民主主義の危機をどう伝えていくべきか、という問題がとりわけ旧世代からとりあげられてきたのであった。確かに新しい世代には体制埋没的傾向があり、克服

すべき欠点もいくつか含まれている。しかしいっぽうでは「こんにちの若く新しい世代はわたしたちの戦争下の状態にたいしてはげしい批判を向けはじめた。かれらは治安維持法の本当の恐ろしさを知らぬためのこわいもの知らずだから転向を無慈悲に非難するのだという申訳は許されない。若い世代は、年長の世代の転向をはげしく批判することによって自分たちをもはやそのわだちを踏まぬ者として自己を明確に規定しはじめている<sup>(2)</sup>。」このような世代が生まれつつある現実を見落としてはならないであろう。

世代の断層は、歴史の大きなうねりの中に生じ、その裂け目を現わすが、それが必ずしもマイナスの要因のみをもっているとはいえない。世代の断層から、世代間の対立点ばかり強調することはいたずらに葛藤・混乱を引き起こすだけである。「日本の国民を世代によって分裂対立させるとするのは非常に間違いだと思います。つまり20代、30代、40代のそれぞれのしかたで戦争中受けてきた痛手なり歪曲なりというものが、それは受け方は違うと思うんです。しかし、同じものから違ったしかたで受けた痛手なんで、その私達に痛手を与えたものに対しては、各世代が一致して闘っていかねばならない。そういう点では世代がみんな手を握っていくべきだし、世代を分裂対立させるやり方とは対立していかねばならないと思います<sup>(3)</sup>。」という考え方が敗戦後まもなく出ている。この視点は世代論における基本的な選択の指標である。

世代間の断層は「戦時中に日本人民が反戦闘争を組織し、自らの力で戦争を終結に導き、戦後の民主主義的改革のイニシアチブを握るというコースを歩むことができず、天皇の名による終戦を自失のうちにむかえ、占領軍の上からの民主化措置をまって初めて解放のたたかいに立ち上がりえた」という弱さにあるとし、それゆえ世代間の断層をこえるためには「世代の差をこえた広汎な統一行動<sup>(4)</sup>」の展開が必要であるとする姿勢は、今後の世代の断層を止揚させる意味で一つの有力な示唆といえよう。

事実、それは昭和33年の警職法反対闘争にはっきりと実証された。戦前・戦中世代は治安維持法下の戦前体制を想起し、岸体制に対するたたかいのエネルギーを結集した。戦後世代は、自分たちの生活をおびやかすリアルな認識問題として「デートもできない警職法」というスローガンの下に集結し、かつてない広汎な運動となった。このたたかいを通じて戦前・戦中世代と戦後世代の交流が行なわれ、その思想は実感的体験として語りつがれたのである<sup>(5)</sup>。いわば、統一行動における世代の断層は、それ自体が相互の体験交流の中で血肉化して引き継

がれるのである。

## 第2節 世代論における階級性

世代論をカテゴライズする試みはこれまでに何人かの人たちによってなされてきた。また世代を区分する基準をどこに求めるかという問題についての試みも熱心に行なわれてきた。こうしたいくつかの試みはいずれも社会理論として、世代論を位置づけようとしたものといえることができる。しかし、いずれの試みも世代論を社会理論の体系の中でとらえるにはまだ充分ではなかった。世代論をいかにカテゴライズしても、世代論をいくらこまかに区切っていっても、世代の本質を明らかにすることはできなかった。むしろ、詳細に分析の枠組をつくれればつくるほど、世代の本質はそこから遠ざかっていった。

それでは世代論を社会理論の中に位置づけるにはどうすればいいというのか。どんな方法をもってこの課題にアプローチしたらよいか。それは世代を一般論として、部分的にとりあげるのではなく「歴史の主体的条件として、歴史の向上的分枝の発展のために、特別に積極的性格を有する、特定の社会的階級の世代」こそを問題にすることである。杉山英樹がこのことを主張したのは昭和10年のことであるが、その論証の正しさは今日なお少しも減じていない<sup>(6)</sup>。彼は「歴史において人間の世代が、主体的に重要性をあたえられるのは特殊的には、文化の連続・伝承という形式においてである」といいそれは「階級文化の継承」に他ならないという。そして「世代」は現存しており、それは肯定させるべきものであるが、「歴史的後退に役割を果たしている」世代は否定されなければならない。ここで世代は明確に階級の位置づけをあたえられる。さらに「世代がそれに先行する他の諸世代から継承するものはけって文化だけではない」「先行する諸世代の目的がこれに続くものの歴史であるというような単純な考え方がいかにはなはだしい誤まりであるかはいふまでもない」という。すなわち世代による文化の継承とは、たんに前のものを後にひきつぐということではなく、「前にくるものと、その後にくるものとは、それによって結びつけられ、相互的な制約」ともなる弁証法的発展をともなるものでなくてはならない。

マルクス・エンゲルスの言葉をかりていえば、世代の交代、つまり文化（正確には階級文化）の連続と伝承は「新しい世代によって改変」されるばかりでなく「新しい世代にそれ特有の生活諸条件を指定し、それにある特定の展開、ある特殊な性格をあたえる」のであり、そのことは「環境は、人間が環境をつくるのと同様に、人間をつくる」というテーゼと全く一致する<sup>(7)</sup>。

世代に対するこのような階級的視点が、わが国で再開されたのはこれよりずっと遅れており、その数も極めてすくない。世代論の一般の命題として、これを対立・分裂させず、共通の目標に提携してあたっていくという主張は戦後まもなくから出されていた。<sup>(6)</sup>しかし階級性を自覚する点ではいずれの世代論においても欠落があり、こうした空白期において世代と階級の問題を論じたのは松下圭一氏であった。氏は「全体制的な階級関係の基本的転換をともなわない歴史の地滑りは〈階級〉よりも〈世代〉を前面におしだす」したがって、今日の日本の世代の対立は「変革の思想の未成熟」が原因であると主張する。そして世代論がそれ自体として意味をもつとは考えないが「日本の変革の思想の形成にあたって各世代が、日本近代史のそれぞれの段階で獲得した独自の実感をもって、いかに主体的に参加していくかという変革思想形成の組織論の一環として、はじめて意味をもちうる」という。つまり「世代感覚」(傍点原文)を「歴史感覚」(同)に転化させることが、世代論に求められているというのである。それは警職法闘争にたちあがった各世代の抵抗運動が、歴史形成への主体的参加として歴史感覚に高まったことによっても実証されている<sup>(7)</sup>。

杉山氏と松下氏の世代論には本質的なちがいがあ。杉山氏は世代を階級構成員とみなしているが、松下氏は「世代は階級の論理をふまえてのみ歴史形成力となりうる」と述べ、世代それ自体の階級性を否定している。私は松下氏の意見が、今日の段階ではかなりの説得力をもっていると思うが、考え方の基本線としては、「世代の階級性」を認めることのほうがより重要だと判断している。その中で、後退的役割をもつ部分と前進的役割部分を峻別し、前者を否定していけば、世代の階級性の純粋さを保ちうるし、そうした過程が、まさしく、広汎な大衆の統一運動の中でより明確になってくる。歴史形成力でないものはすべて階級性を有しえないということになれば、大衆はすべて無階級として片づけられてしまうことになる。大衆の中にひそむエネルギーを無視して歴史形成力が生まれるはずはないのである。

階級的世代の論理はその後、竹内真一氏によって展開された<sup>(8)</sup>。彼は「世代が階級より」前面におしだされてきたとする点で、松下氏と同じ理解を示したが「無党派が党派より」前面におしだされてきた従来の世代論をつぎのように批判した。「戦後世代や同世代から大量に登場した無党派活動家に、階級や党派の革新剤としての期待がかけられ、かれらの意識的な特徴点を出発として、その自然延長的あるいは同心円の発展の方向に将来の展望が構築され」「戦後世代、または無党派活動家の社会的登場という現実を背景に、その成長に熱い明日への期

待が吹きこまれることによって、全体をつらぬく論調は一般にきわめて『楽観的』な未来展望がいちじるしい」いってみれば竹内氏のこの世代論は、従来のすべての世代論に対する否定である。世代を階級的に形成していくためには「無党派活動家の党派的結集」が不可欠であるとするこの論文は、世代論を明瞭に階級的視点からとらえた、高い水準をもつものといってよい。彼は「若い世代の登場を、労働運動と民主主義運動の再編成のテコとしてとらえ、そこに将来展望の土台をすえようとする青年労働者の『世代論』的な把握は、近代民主主義の歴史的・党派的性格を忘れ、それにたいする小ブルジョア的な物神崇拜におちいつていることを意味」と、きびしく批判する。竹内氏の鋭い提起と指摘にもかかわらず、問題として残るのは党派的活動家を重んじるのあまり、無党派的活動家をまったく否定しきっていることである。テーゼとしての「無党派活動家の党派的結集」というスローガンはまさに正しい。しかし、そのためには無党派世代構造の正確な分析が必要とされるであろう。数の上からいえば竹内氏が真向から否定する無党派の世代は党派的世代を圧倒的にしのいでいるのが現実である。階級的世代論にとってはむしろ、そのことが問題なのである。なぜマイホーム主義型、あるいは体制埋没型世代が多いのか。そのことの分析と理論化なしに階級的世代のみの全面的評価は中味のない空疎なものになってしまうであろう<sup>(9)</sup>。

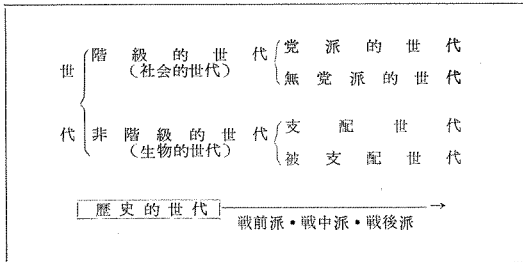
しかしながら世代論を社会理論の視点の中にすえようとする機運はわずかながら進行しているといつてよい。しかも、それらが階級的視点からなされており、階級構造とその概念をめぐる思想状況の混乱は一朝にして、世代論を確とした方向に位置づけるにはまだ至らないように思う。にもかかわらず、世代論がジャーナリズム的・風俗的次元をこえつつあることはここではっきりと確認してよいであろう。

レーニンは「ブルジョアジーを批判し、大衆のあいだにブルジョアジーにたいする憎悪をおこさせ、階級意識を発展させ、味方の勢力を結集する」ことが現在の世代の任務であると説き、この任務を果たした世代にかわる、新しい若い世代は「この地盤のうえに若い共産主義的世代が、共産主義社会を建設しなければならぬ<sup>(12)</sup>」と説いた。階級的世代の任務と役割は今日においても明瞭、不変である。階級的世代とはこういう世代である。

### 第3節 世代論と青年教育

わが国の戦後を中心とした世代論の流れを見て、あらためて感じることは、世代一つをとってみても、いかに未解決で、未知の領域がたくさんあることかということである。そして国民的課題として残された未決の問題も

第3表 世代の系譜



また多く残されており世代論は、いまようやくして、戦後未決の問題を解きほぐす端緒になっているところである。

世代の構造を整理すると(第3表参照)きわめて不統一ではあるが、歴史形成力をはらむ可能性を秘めた階級的世代があり、これは社会的概念のカテゴリーである。そしてそのもとに党派の世代があり、無党派の世代がある。無党派の世代にはさらにマイホーム型、ノンポリ型、体制埋没型等々が含まれるわけである。

つぎに生物学的つまり世代交代的な概念としての非階級的世代があげられる。この世代は支配世代(The Older)と被支配世代(The Younger)があり、明治生まれ、大正生まれ、昭和生まれといった世代がこれに含まれる。

それといま一つあげられる特殊世代がある。それは時間を単位としながら、歴史的な流れの中の影響によって形成される世代である。これを歴史的世代とよぶ。戦前派・戦中派・戦後世代等がここに含まれる。

世代論を社会理論の中に位置づける枠組みは階級的視点の導入があってはじめて可能であるが、いま一つのモメントは文化価値遺産の継承を原点とした支配世代と被支配世代の葛藤の論理を展開していくことである。この方法の欠陥は課題設定の前提に伝承過程の変革を認めないというアメリカのユース・カルチャー的志向が強いことであるが<sup>(13)</sup>、既成の文化価値遺産を支える支配世代の権力構造と支配構造の論理を明らかにし、被支配世代としての若い世代の心理学的、社会学的な葛藤と抵抗の論理を追究するという視点を世代論は必要としていることができる。

しかし、世代論の中心座標が青年世代にある<sup>(14)</sup>ことを思えば、次代の担い手としてのこの世代の教育学的研究がより重要なものとなってこなければならない。確かに世代論には社会化と教育に関する視点が欠落している<sup>(15)</sup>。このことの指摘はとかく世代論の拙速の否定に援用されやすかったのであるが、世代論が青年世代を原点として文化遺産の継承と創造を必然の本質として問題にしていく以上、それは教育と社会化に深い関連をもって

おり、とりわけ、文化遺産の継承と創造という教育的機能を世代論が内在していることを重視すべきであろう。これまで世代論は思想史上あるいはジャーナリズムの中だけでとりあげられるにすぎなかったが、その意味で世代論をもう一度吟味しなおすべき時期がきているということができるのである。いうまでもなく、その基本的視点は世代論における教育との関連における、青年教育に求められる。

これまで青年教育の研究はどちらかといえば青年の価値意識、生活構造、集団、学習形態、学習内容編成といった領域でかなりの成果をあげてきた。いいかえればこれらの研究は青年自身に直接かかわってくる課題解決にアプローチするもので、研究の枢軸が青年を原点に置いていることから微視的研究のオーソドックスな形態であった。この研究方法(=微視的研究)は今後もその重要性は変わらないが、それと対置して、青年を含んだ課題解決を志向する研究方法が置かれていいであろう。その新しい研究方法の鍵概念あるいはモメントの一つとして世代論を導入したい。世代論と青年教育は、青年に主体権を確立させる方向で社会的課題(=国民的課題)とするべく切り結ぶ機能を果たすのである。いわばこれはさきの微視的研究と対比して巨視的研究ということができる。巨視的研究における青年教育は社会的課題解決を学習の基本とする。そのためにはまずもって青年の主体権を確立するよう努めなければならない。青年はただ教育さるべき対象ではなくて支配世代や既成文化に対して創造的営為を行なう主体としてとらえられなくてはならない。そうなるのはじめて青年は社会的・国民的課題をめざす主体者の一員としての地歩を固めることができる。世代論と青年教育の結合における課題はしたがって、いかに青年の主体権を確立するかということになってくるのであり、この視界を欠落させた青年教育論は結局のところ青年を大人と子供の周辺人としてきめつけてしまう悪しき伝統に墮してしまうだけであろう。

青年教育を包括する社会教育も世代論のモメントを必要とする不可分のカテゴリーである。社会教育が巨視的研究方法として導入するモメントは「大衆(民衆)」が中心になっており、この傾向は最近次第に強まっていくように思われるが<sup>(16)</sup>、この場合の「大衆」は大衆社会論をひっさげて登場した人々よりもはるかに概念的・抽象的にしかとらえられていないというのが実情である。社会教育の分野における大衆論はその意味で今後の課題として残されているといえてよい。ただ世代論と社会教育の接点でいえば、どうしても「戦争責任」を固定させた座標軸にすえてとらえかえされなければならないということ、はっきりさせておく必要があるだろう。戦後24

年の日本人民の歩みの中に、戦争という社会的矛盾の典型が内在的・外在的に社会教育の矛盾とどういう脈絡をもってきたか。この点の厳密な検討と分析がなされることなく、社会教育の今日的課題の新たな設定は急がれるべきではない。「社会教育にたずさわるもの場合は、これまで広く民衆の戦争体験を掘りおこすことをおこなって、まったく別の視角から戦後民主主義と平和の問題を課題の中核に据えようとしてきた<sup>(17)</sup>」という率直な反省のうえに戦後社会教育はいま一度、総点検されるべきであろう。

小稿は、わが国における戦後世代論の構造と特質を明らかにすることを主目的としたため、もっとも肝心な世代論と教育の結合という問題に深く立ち入ることはできなかった。しかし本研究は、教育とりわけ社会教育の中に占める青年教育研究の基礎的・序説的段階にすぎなかったのであって、本論はこの後の継続研究として取り組まなければならないと考えている。世代論と教育を結ぶ論点は、まず戦争責任を固定軸とした大衆論と青年論の展開のなかで切り開かれていくことになる。

#### 〈注〉

- (1) 佐藤昇「日本の民主主義と戦後世代」『思想』昭和34年7月号 9ページ。
- (2) 小田切秀雄「世代の裂け目」『世界』昭和29年2月号 147ページ。
- (3) 小田切秀雄他座談会「世代について」『日本評論』昭和22年10、11月(合併)号 36ページ。
- (4) 佐藤昇 前掲
- (5) 石原慎三「労働組合と戦後世代」『思想』昭和34年 31ページ。私がここで興味をもつたのは氏の戦後世代についての4つの状況分析である。氏は(1)従来の指導者層が戦後の世代に対して指導性を失っている(2)戦後世代は巨大なエネルギーをもっているがそれが組織されていない(3)それに対して支配階級はPR・HR等によつてマス・コミの発達、消費的大衆文化の進展を利用しつつ戦後世代を自分たちの側につかせようとしている(4)現在の段階では戦後世代の多くは労組側といわず支配階級の側といわず、外からの指導に対しては奇妙に無関心を示し、自分のことだけに熱中する。(33-34ページ)とりわけ(2)および(4)は戦後世代に対する教育の反省と新しい方針(研究)がなされなければならないことを示唆していると思う。
- (6) 杉山英樹「世代について」『唯物論研究』昭和10年 第36号 10月号。
- (7) マルクス・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」国民文庫版 73ページ。
- (8) 小田切秀雄「世代について」前掲。
- (9) 松下圭一「戦後世代の生活と思想」(上)『思想』昭和34年7月号 12-13ページ。
- (10) 竹内真一「『世代』論と青年保守化論」『戦後日本国民の自己形成』所収 国民教育研究所 昭和42年。
- (11) 竹内氏は同論文のなかで、これまでの世代論が「民主主義の観念的・小ブルジョア的な理解」にすぎないとくり返し強調する。その根拠を「一般に調査者の作業仮説の枠内でしか状況を前態的かつ量

的にしかとらえることのできない多岐選択調査の結果から、日常的現象の観察も加味して平均的に構成される『私生活型民主主義』などの意識類型はすくなく政治的意図を裏に秘めた『まどおしの輪』としての『マイホーム・マイカー・マイワイフ』というような小ブルジョア的生活設計の宣伝によつて誘導される青年労働者の『なによりもまた、もつとも容易にあらわれる』現象的表層をとらえることができても、かれらの低生活水準と社会的欲望とのあいだでたたくかわれる葛藤を深部から通確に反映しているものと考えすることはとうていできない。重要なことは、そのような社会的欲望が、毎日の実生活ときりむすぶときにうまれる複雑な矛盾をおして運動するダイナミックな状況である」というところに求めている。それではマイホーム型世代は虚構世代なのか、実在しないのか。そうではあるまい。青年世代の保守感覚はペーパーアートの誘導によつたものだと断定するのは社会科学としての方法を不当に歪曲するものである。現実には保守感覚をもつた、体制埋没的な世代を無視して、一方的に党派性のみをもつてはやす特有の党派的態度が今日の大衆による党派性不信を招いている現実をきびく自己批判すべきであろう。

- (12) レーニン「青年同盟の任務」『青年論』国民文庫 20ページ。
- (13) 支配世代と被支配世代は、前者がつねに社会的、政治的、経済的地位を占め、後者がその統制下に従属するという、歴史的な社会事実がある。マンハイムの指摘によれば、変革や進歩をのぞまない、靜態的社會では文化価値体系は支配世代の圧倒的勢力によつて交えられ、被支配世代としての青年の地位はきわめて低いものになる。古い世代は新しい世代の存在をそれほど意識せず旧態がそのまま引継がれるのである。(K. Mannheim "Diagnosis of our time" 1943, 33ページ)アメリカにおいては、世代論は「文化の連続」としてとらえられ、その代表的な研究領域は「青年文化」(youth culture)である。わが国においても、最近こうした視点にたつアプローチが試みられるようになってきた。(矢野弘「青年文化」の研究『九州大学教育学部紀要』昭和40年 第10集。および「特集・ユース・カルチャー」(吉田昇・西平直喜)『教育と医学』昭和45年8月号など)
- (14) このことは、世代論の展開主体者が青年世代にあるということの意味しない。世代論の主対象が青年世代におかれているということと述べているにすぎない。もつとも望ましい世代論の展開はそれぞれの世代が主体権をもつてなされることであり、とくに主体権を無視される傾向の強い青年世代の問題はそれ自体で再検討されなければならないものである。
- (15) 小林文人「青年期をどうとらえるか」『教育社会学研究』第22集 昭和42年 11ページ。
- (16) ごく最近のものでは藤岡貞彦「社会教育実践と民衆意識」『月刊社会教育』昭和44年3月号がある。ここで藤岡氏は社会思想家家川大吉氏の民衆意識研究の方法を紹介しながら、社会教育の学習主体(成人・青年・婦人)研究を結合させることを提起しているが、理論的に熟したものとなつてはおらずむしろこの研究は端緒にすぎたばかりといえるのである。
- (17) 田辺信一「戦争体験と社会教育はなぜ無縁か」『月刊社会教育』昭和36年8月号13ページ。田辺氏はさらに社会教育が戦争体験の継承を怠つた理由として4点をあげて説明している。「(1)戦争責任の追求が極東軍事裁判によつてあたかも断罪されたかの支配者の意図的策謀(2)「民主主義表現」「平和国家建設」といつた抽象的スローガンによる教育主義と文化主義政策の遂行(3)学校制度の補正・拡張の論理(4)国民の自己教育運動と公的社会教育の分割。」戦争責任の追求の火の手が支配者階級の意図的な干渉のもとで消されてしまったということは、それが支配者側のストラテジー構造を明らかにし、そこから教訓を得るという視点でこそ有用だが、今の時点で戦争責任の追求を説く場合にはこのような姿勢は単なる結果論に導くばかりである。むしろ、人民的課題としていかに戦争責任を追求するかというストラテジーが必要になってくるのである。